専門性に加え社会性の育成が大学教育の責務

立教大学経営学部長
山口和範
Yamaguchi Kazunori

社会が急速に変化するなかで、
人材育成の中核を担う大学教育はどう変化すべきか。
積極的な学部教育改革で注目を集める
立教大学経営学部長の山口和範教授が、
同学部での実践を交えて
これからの大学教育の在り方について語る。

九州大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。理学博士。専門は統計科学。少人数教育プログラムの開発など経営学部の教育改革を牽引する。

これからの学生に求められる主体性、社会性、専門性

即戦力ではなく組織で働く基礎力を持った人材を育てる

多くの学生は、卒業後、組織の中で働くことになります。いろいろな価値観を持つ人と関わって仕事を進め、更に変化が進む社会に対応しながら自分の強みを発揮していくうえで、どのような力が必要になるのか。私は、主体性、社会性、専門性の三つがポイントになると考えています。

全てのベースになるのは、新しいことに前向きに取り組む主体性です。今の学生は、高校時代までは基本的に答えのある課題に取り組んでいます。背景には、今日の大学入試がそのような問題で成り立っていることもあるでしょう。

しかし、社会では答えが一つではない課題に取り組まなければならないばかりか、そもそも課題自体が明確ではないことが普通です。そういう状況では、受け身の姿勢ではなく、主体的に課題を発見して解決する力が必要です。大学教育を通して、どのように主体性を育てるかは重要なテーマの一つといえます。

社会性と専門性は、社会性が横軸、専門性が縦軸の関係で捉えるとイメージしやすくなります（**図1**）。

大学教育では、社会との接続を意識した教育が不可欠ですが、それがイコール「即戦力」ではありません。企業の第一線で専門知識を生かして実績を上げる力を即戦力と考えたとき、これを学部レベルでの大学教育で育てるのには無理があります。

そういう意味での「戦力」ではなく、自分の役割を自覚して、若い世代の代表として意見や知識を提供することで組織をより活性化させていく力を、我々は育てるべきでしょう。そのために必要なコミュニケーション能力をはじめとした基礎力が、大学で身に付けるべき大切な社会性と捉えています。これは、経済産業省が提唱する、いわゆる「社会人基礎力」に当たる力と考えてよいと思います。

すべての社会人にリーダーシップが必要

リーダーシップも、不可欠な社会性の一つです。リーダーというと、固定化されたリーダーが集団を引っ張ることを思い浮かべる方が多いでしょう。しかし、本学ではそのようには考えず、リーダーとは、例えばグループワークが進行するなかで、

その都度、変わっていくべきものと捉えています。自分の役割を果たすべき瞬間が訪れたときにリーダー性を発揮して、チームに貢献することが求められます。ですから、全ての人がリーダーシップを身に付けなくてはなりません。そのようなリーダーシップの必要性を理解して身に付けていれば、集団を率いるという一般に使われる意味でのリーダーシップもおのずと育っていくはずです。

アカデミックな教育の役割は「学び方」を学び取ること

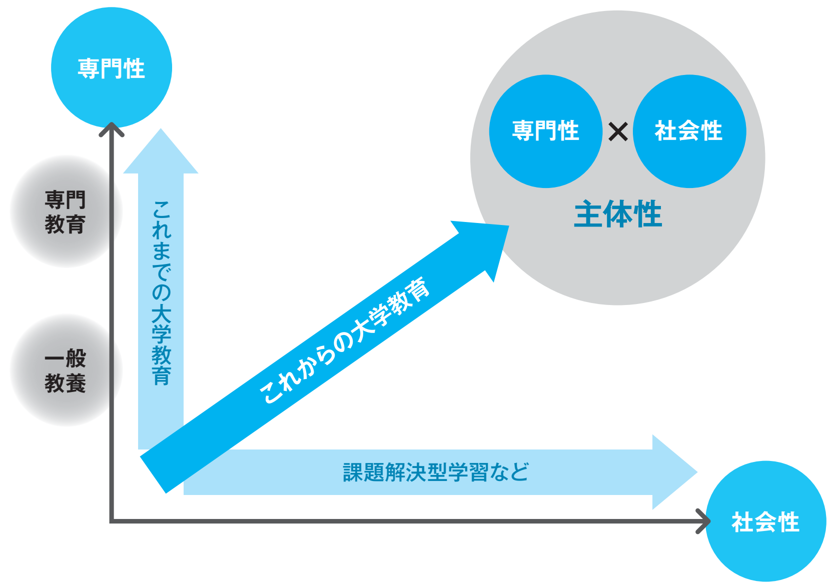
社会性を育てる必要がある一方で、専門性、すなわち、アカデミックな教育もまた、大学教育の使命といえるでしょう。コミュニケーション能力などを育てることだけに力を注ぎ、専門性が育たなければ、各学部に分かれて学ぶ意味はありません。

専門性とは、専門知識の集まりというよりは、各学問によって異なるものごとへのアプローチの仕方、いわば学び方に本質があると考えています。例えば経営学部なら経営学的、文学部なら文学的なアプローチの仕方があります。学生時代、こうした学び方をしっかり学んでおくことで、社会に出て新たな問題に直面したとき、自分なりに必要な知識やスキルを学び取って解決に向かえるのです。

チームとは、同じ考えを持つ人だけではなく、異なるバックグラウンドを持つ人が集まったときのほうがより大きな成果を出せるものです。一つの問題に対して、異なるアプローチが出来る人が複数いるほうが、多様なアイデアが生まれやすいからです。ですから、学生がしっかりと専門性を身に付けることは、組織で存在感を発揮することにつながるのです。このようにして横軸の社会性と、縦軸の専門性はリンクしています。

横軸と縦軸とはバランスが大切であり、どちらか一方しか育てないという状態は、大学教育として不十分といえます。しかし、どちらにより重きを置くかは各大学の方針によって異なってよいと、私は考えています。日本ではまだ許容度が低いですが、アカデミックに特化した一部のエリート養成も、もっと重視されてよいかもしれません。何より重要なのは、各大学がカリキュラム・ポリシーなどによって、外部に対して教育の中身をしっかりと伝えることです。これが徹底されれば、「もっとアカデミックな勉強がしたかった」といった入学後のミスマッチは未然に防げるでしょう。

図1　大学の役割



縦軸：専門性 → 学び方、課題へのアプローチの仕方を育成する
横軸：社会性 → 協同するために必要な力を育成する

＊インタビューを基に編集部で作成

学習活動のなかで社会性と専門性をリンクさせる

現代の社会環境では社会性は自然には育たない

今の大学では、なぜ、社会性の育成が重要視されているのでしょうか。

社会に出てから求められる力は、基本的に昔も今も大きくは変わらないと、私は考えています。しかし、本学の教育を考えると、以前に比べて社会性の育成に、より大きな比重が置かれるようになってきました。この方向性は、どの大学でも基本的には同じでしょう。

大学関係者には改めてご説明する必要はないかもしれませんが、これ

は入学する学生の質の変化が大きな要因です。大学の大衆化によって多様な学生が入ってくるようになりました。社会の変化によって学生の特性が変わってきていることも大きいですし、社会全体の教育力の低下も無視できない問題です。20年前、30年前は、幼い頃から地域社会で育てられたり、異年齢の集団で遊ぶなかで価値観をぶつけ合ったり、兄弟の交流で刺激を受けたりする機会が、今よりも多くありました。そうした経験を通して、おのずと社会性の素地は育ちました。

また私の学生時代を思い起こすと、友人と最も議論した時期は高校時代でした。今の高校生はあまりそういうことが好きではないのか、時間的な余裕がないのか、ともかく友人と本気で関わるよりも、大学受験に向けて個人で頑張る時間が増えているようです。情報機器の操作に長け、より多くの情報を得ているのも今の学生の特徴ですが、人とつながりを持つ力、言い換えれば社会性は昔の学生のほうが上でしょう。

社会性の低下によって友人をつくれない学生も

ひと昔前は、もともと学生が社会性の素地を身に付けていたから、大学はアカデミックな教育をするだけでバランスのよい状態で卒業させられました。しかし、現在、同じ教育を行っても、社会で活躍できる人材はなかなか育たないでしょう。実際、きちんと授業に出席する成績の良い学生が、必ずしも社会で活躍できるわけではありません。

また最近の学生の社会性を表す象徴的な例として、大学の中でうまく友人をつくれないケースが増えていることに多くの大学人は気付いています。そういう学生は、就職活動もなかなかうまくいきませんから、人間関係の面からフォローする必要が生じています。20年前なら「そんなことまで大学がしなくてもよい」という声が聞こえてきそうですが、そこは時代の要請だと理解しています。

就職を巡る学生の意識変化も、大学は把握をしておく必要があるでしょう。昔の学生は、大学でそれなりに勉強すれば、卒業後、普通に就職できるという安心感を持っていました。今の学生は違います。アカデミックな勉強だけをしていても就職できるのかという不安が非常に強く、安易な資格取得や就職試験対策に走ってしまうケースも少なくありません。学生が一定の将来展望を持てないことで、アカデミックな教育が成立しにくくなっていることは十分に留意する必要があると思います。

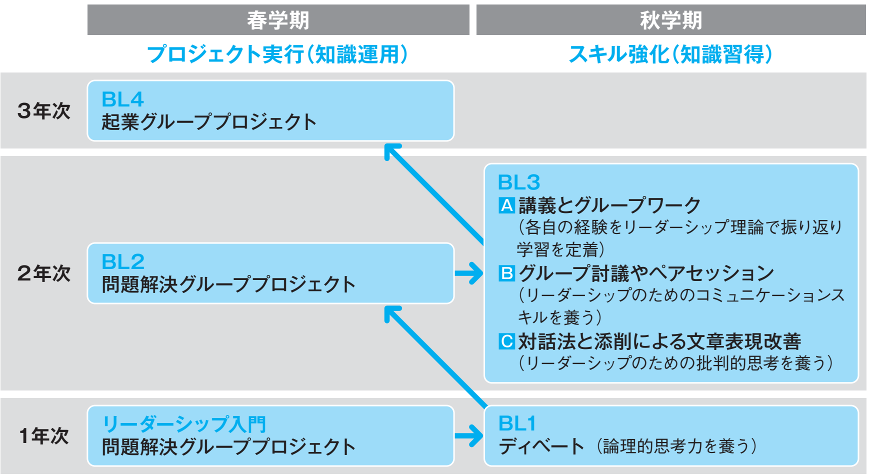
チームで議論する学習の効果

今、お話ししてきた通り、専門性よりも社会性の育成を重視せざるを得ない現状のなかで専門性の育成もバランスよく行うためには、授業のなかで横軸である社会性と縦軸である専門性をうまく関連付けることです。このことについて、本学の経営学部経営学科での実践を交えてお話ししましょう。

本学の経営学科では、ＢＬＰ（ビジネス・リーダーシップ・プログラム）という、プロジェクト型学習を核としたカリキュラムを取り入れています（**図２**）。このプログラムは、チームでビジネス課題の解決に取り組むもので、１年次から３年次の２年半にわたり、学年が上がるごとにプロジェクトが高度化していきます。チームは４、５人で構成され、グループ内で全ての学生が役割を持ち、何らかの形でリーダーシップを発揮しなければプロジェクトが進行しないようになっています。その過程でリーダーシップやチームワークの必要性を経験し、またコミュニケーション能力が磨かれて、社会性が育っていくのです。

近年、多様な学生が入学している

図2 立教大・BLP（ビジネス・リーダーシップ・プログラム）のカリキュラム



「リーダーシップ入門」は経営学部の学生は全員が履修する科目。「ＢＬ１・２」は経営学科の学生は全員必修で、国際経営学科は選択科目として履修できる
＊大学資料を基に編集部で作成

ことをお話ししましたが、プロジェクト型学習ではこれは大きなプラスになります。さまざまな思考や経験を持つ学生が集まり、極端な話、すぐにさぼるような学生もいたほうが、社会の縮図のような状況が生まれやすく、実践的な学びとなるのです。

プロジェクトの成果は、コンテスト形式で評価することになっており、評価の基準は一元的ではないことを実感させます。世の中は単純ではなく、あやふやな問題に対して、自分たちが視点を定めて問題を定型化し、答えを出さなくてはなりません。視点の定め方によっては、多様な答えが出ます。評価の基準も、自分たちの思い通りとは限りません。そういう意識を持たせることが、プロジェクトの大きな狙いの一つです。

プロジェクトで得たスキルをアカデミックな学習に生かす

課題設定においては積極的に産学連携を推し進めています。経営学部という学部の特性上、企業とのつながりを持つことは学生のモチベーション維持に大きな意味を持ちますが、社会イコール産業界とは考えていません。学部によっては、行政機関や地域団体、研究所などとの連携も有効です。実際、本学のコミュニティ福祉学部などは、地域社会との連携を教育活動に生かしています。

こうしたプロジェクト型学習を前期（春学期）に行い、後期（秋学期）は主にアカデミックな学習を進めることで、横軸と縦軸のリンクを図っています。プロジェクト型学習で学んだ知識やスキルをアカデミックな学習で生かすように意識付けることは非常に重要です。そういう訓練を積むことで、社会に出ても大学で獲得したアプローチの仕方を生かして、新たな知識やスキルを得ることが出来るからです。そのような学びを促すために、教員は授業の内容や進め方を変える努力を続けています。

プロジェクト型学習は時間がかかるため、アカデミックな学習にかける時間が圧縮されることもあります。横軸と縦軸をうまく関連付けることが出来なければ、プロジェクト学習は「楽しかった」「達成感があった」といった感想だけで終わってしまい、更に以前と比べて専門知識も身に付かないという結果を招きかねません。その点には十分な注意が必要です。

大学はこれからも人材育成の中核を担っていく

学び方を習得したという自信を持たせることが大切

日本が現状維持に留まらず、今後も継続的に発展していく社会を望んでいる限り、人材育成の中核を担う大学の使命は大きいです。むろん、人材育成は企業を含めた社会全体で取り組むべきですが、やはり大学をはじめとした教育機関が中心になるというのが基本的な考え方でしょう。

アカデミックな力を十分に育てながら、社会性を身に付けて変化する社会に対応できる人材を育てる。そのためには、正課・正課外の両方で成果を出していくべきでしょうし、教員と同様に、職員も教育の担い手であるという考え方が重要だと考えています。例えば、職員が運営するキャリアセンターの活動内容は、正課の授業と結び付くことで、より大きな成果を生み出せます。

そもそも大学で出来ることには時間的にも内容的にも限界がありますから、大学だけで人材育成を完結させるという意識は持つ必要はないと思います。ただし、どの学部であっても「学び方を習得した」という自信を持たせることを徹底すべきです。本来、世の中の事象は、分からないことが大半です。そのことをきちんと認識して、なおかつ新しいことを自分で学んでいく方法を身に付けさせることが重要です。

コミュニケーションに不可欠な他者理解を促す取り組み

また他者への理解を深めるには、一定の知識も必要です。そこで本学では2012年度より、各学部の学問的なアプローチの仕方について、他学部の学生に教えるという授業を導入します。例えば、経営学部の学生に対し、文学部や理学部、法学部などでは、どのような考え方でものごとに迫るのかを教えるのです。他学部の学び方を理解したり、そこまでいかなくても、「世の中には、自分とは異なる考え方やアプローチをする人がいる」ことを知ることにより、コミュニケーションに不可欠な他者理解を促したいと考えています。

今の学生は、社会に出てからも学習を継続していく必要があります。そのことを大学が意識して、卒業後も伸びていけるような素地を十分に育てることが、大学と社会をつなぐうえで最も大切なことではないでしょうか。